

昭和
和
二十四
年
四月
二十
三日
第三
行
(種
郵便
物
認可
行)
每月
一回
・十五
日
(発行)

(通第二三六号)

慈

光

第二十一卷

第一号

次

善惡貧富と絶対救済

……近角常観……

(1)

「篤く三宝を敬え」

……白井成允……

(6)

平生業成

……和才誠司……

(19)

目

長岡翁を悼む

……千葉崇憲……

(21)

母の法の歌をしのびて

……松井哲……

(23)

善悪貧富と絶対救済

近 角 常 観

吾人日常の生活において、常に吾人の脳裡を去ることの出来ぬものは、善悪の觀念である。倫理道德の意味における善悪をはじめとして、是非善悪の沙汰にいたるまで、よしあしの言語をはなれて思想を云いあはわすことの出来ぬほど肝要なる考である。

しかもその善悪を判断するには、何人も自己中心で考えるものである、しかして自分では公平正義のつもりである。ここにおいて益々是非善悪が粉雜するようになる。何人も是(ぜ)を是(ぜ)とし、非を非とするものであるが、本来、是とみとめ非とみとめるものは自己中心である。ここにおいてや、是非善悪がわからぬようになる。

「人皆心あり、心おのおの執るところあり、彼是なりときは、我非なり、我是なるときは、彼非なり。我かならずしも聖(ひじり)にあらず、彼かならずしも愚にあらず、共にこれ凡夫のみ」との金言を服膺せねばならぬ。「是非知らず、邪正もわ

かぬこの身なり」とか、「善悪の二つ總してもて存知せざるなり」とかの聖人の教訓は、千古不磨の真理と贊仰せねばならぬ。

○
このごとく倫理道德をはじめとして、日常生活にいたるまで、一言一行、よつてもつて判断せんとする、是非善悪の標準が狂うてきては大恐惶たらざるを得ぬ。

ここにおいて真実の求道者は行き当らざるを得ぬ。とかく世の信者なるものが、この卓において十分解決を得ているものがすくない。そもそも親鸞聖人の真宗において、最もいちじるしき点は、この問題を解決したところである。ことに歎異鈔の始終を通して、問題の中心となりたるものはこれである。

第一条に

「弥陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず、ただ信

心を要とすとしるべし、そのゆえは罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。

しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに、惡をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆえに」

をはじめとして、第二条、三条、十三条、および結文にいたるまで、弥陀の本願の絶対救済をもって、一点の餘地なく解決したまいてある。歎異鈔と同意味の口伝鈔における、聖人の御自誓を拝誦するときは、かくまで徹底したる信仰を人生に持ちきたされた聖人の真宗を仰がずには居られぬ。曰く、

「聖人親鸞のたまわく、それがしは善もほしからず、また惡もおそれなし。善のほしからざるは如來の本願にまされる善なきゆえに、惡のおそれなしというは、如來の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆえに」と。

歎異鈔をひもとくほどのものは、何人も善惡の二者の判断すべからざる底の行き当たりまでは達しているが、行き当たりたぎりである、行き当たりで止りてゐる。この点を通しておらぬ、所謂徹底しておらぬ、行き当たりたままの信仰が多い。いわゆる悪いままとか、善くても悪くてもかまわぬということで終りてゐる。

の光明に照耀さるるのである。この日光をさまたぐるほどの闇はない。換言すれば、如何なる闇も日光に負けてしまふのである。如何なる吾人の罪惡も仏目に頭が下りて、はじめて大慈大悲の本願をもつて満足さるるのである。聖人が、尽十方無碍光の破闇滿願（やみをやぶりぬがいのみたす）の徳を力説したまうのがこれである。

ここに於いて吾人は原始・真宗における如來の本願なる大音宣布と、大慈大悲の徹到とに回顧せねばならぬ。

現時、真宗における病根は、如來本願の溯源に汲むことの出来ぬようになったことである。本願なる大震雷が感ぜられぬほど淋痺していることである。

本願といえはとて、文句ではない、教理ではない。歡喜の心持をあてにするのではなく、勿論未來の結果を目的とするでもない。貧富貴賤、智愚利鈍、有學無學、有罪無罪、持戒破戒、有智無智、大小聖人、重輕惡人、五逆十惡、謗法闍提（ぼうほうせんたい）、如何なるものをも、矜哀悲愍ましまして尽く見捨てたまわず、あきれたまわず、遂に選摂大宝海に帰して、念仏成仏せしめたまう超世無上の如來の本願の出現によりて、人世はじめて絶対救済の仏日をみとめたのである。

本師源空世にいでて 弘願の一乗ひちめつつ

しかし悪いままや、かまわぬで安心出来れば結構であるが、それでは道義の関門は通られぬ。そこでまた常識判断の是非善惡に逆もどりせねばならぬ。

世のいわゆる信者なるものが、他人に対する是非善惡の沙汰においては、ちっとも未信者とえらぶことのないのみならず、はなはだしきにいたりしは、惡をもおそるべからずを誤用して、自己の惡を弁護するの具となす傾向がある。またこれを非難する嚴格論者は、我は正義なりとて、知らず識らずの間に、善惡の沙汰の頂上に坐りておる。

そもそも歎異鈔の「惡をもおそるべからず」という意義は、心配するなどのところである。「汝一心正念にして直ちに來れ我能く汝を護らん、すべて水火の難に墮せんことを畏れざれ」と同意である。むしろ善惡の問題について心配する者にむかつて親切なる観心である。闇夜に灯火の有無を沙汰せなとか、電灯と提灯との区別がないとか云うてもそれは空論である。ひとたび夜が明け太陽輝きてこそ、他の灯火も要にあらず、闇をも畏るべからずということが出来る。とくに「弥陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆえに」というのは、日輪をさまたぐるほどの闇なきがゆえにと同様である。本願といえる仏日が瞭々として四天下を照らすときは、いわゆる内外明闇をえらばず、如來真實

日本一州ごとく、浄土の機縁あらわれぬ
管慧光のちからより 本師源空あらわれ

浄土真宗をひらきつつ 選沢本願のべたまう

との和讃を講ずるときは、如何に当時の日本が選摂本願の出現によりて夜が明けたかが想像さるるに餘りある。

全体、法然聖人が選摂本願をのべたまうときに用いられたる文字は、法照禪師の五会法事讃が源である。曰く

彼仏の因中に弘誓を立てたまえり

名を聞き、我を念ぜば、すべて迎え來らん

貧窮とはた富貴とを簡はず

下智と高才とを簡はず

多聞と淨戒を持てるとを簡はず

破戒と罪根深きとを簡はず

但廻心して多く念仏せしむれば

能く互疎をして金と成ぜしむ

これたしかに法然聖人が弘願一乘（ぐがんいちじょう）を説きたまう源泉である。しかしして親鸞聖人にいたりて「四海兄弟、同一念仏して別の道無きが故に」の浄土真宗として、御同朋、御同行の実行となったのである。

これを要するに、絶対無限の大慈大願によりて、善惡、

貧富、智愚、凡聖の區別なく、平等一味の仏智に融合さるるのである。

名号不思議の海水は 逆誘の屍骸もとどまらず

衆恵の万川帰しぬれば 功德のうしおに一味なり

尽十方無碍光の 大悲大願の海水に

煩惱の衆流帰しぬれば 智慧のうしおに一味なり

ここにいたりて、四河海に入りて鹹味となる如く、四姓仏門に入りて釈種と称せられたる仏教根本の眞精神を再現せられたるものである。

○ 祇尊をもつて、印度の四姓の階級制度を打破して、社会

改革にてもくわだてられたるが如く論ずる社会論者も感心しないが、しかし涅槃の鹹味は一切の階級、男女、貴賤同一なる境界を精き来りて、開神的に融合されたる絶対無碍の平等の信念は、有形社会の問題に大なる結果を来したに違いない。しかしこの結果をもちきたらしたる根本精神に汲まなければならぬ。ここにいたりて涅槃経の偈を想起せしむるものがある。曰く、

「如来の語は一味なること、なおし大海の水の如し。これを第一諦と名づく。故に無々義の語にして、如来今の説くところ、種々無量の法、男女大小聞いて、同じく第一義を獲せしめん。無因また無果なり、無生(むしよう)

我等は日常行為の標準として、無形的に一切の方面に用いられたつある是非善惡にしてすら、この如くである。いわんや貧富財産の問題の如きにいたりては、かならずしも富者はこるべからず、貧者悲しむべからずである。しかれども善惡が我等の行為の標準となる上において、常に苦心の根本である如く、貧富の問題が我等が日常生活の問題において、片時も心よりはなるべからざる必要なる問題である。故に将来、この問題をゆるがせにすべからざるとともに、宗教の信念の結果もこの点において大なる効力をもちきたすこと、釈尊の教が四姓の別を融合されたことくあらねばならぬ。しかしその根源は精神的信念に淵源することを忘れてはならぬ。

近時行わるる救済なるものが、人間が人間を救済するかの如きひびきをもつことは、はなはた面白からぬ傾向である。物質をもつてのみ人心の調和をもちきたすものではない。おそらくは現時日本において、吾世界において、人心の調節、我執の融和を欠くことが、現代の最大病根である。強者、富者はその我欲我慢をひるがえして、如来の下にひざまつき、弱者、貧者も自暴自棄の倒行逆施をひるがえして、如来の慈懷に入るべきである。

政治も国家も、軍国も民本も、この四海兄弟の曙光に照耀されねばならぬ。これ親鸞聖人が如来本願の下に、十方

また無波(むめつ)なり、これを大涅槃と名づく。聞く者諸の結を破る。如来一切の爲に常に慈父母となりたまえり。まさに知るべし諸の衆生は、皆これ如来の子なり。世尊大慈悲、衆のために苦行を修したまうことは、人の鬼魅(さみ)にくるわされて、狂乱の所爲多きが如し。」

いつも渴仰する梵行品(ぼんぎようぼん) 阿闍世王入信懺悔の偈文である。親鸞聖人これを信巻に引用して、本願醍醐の妙味となしたまうをもつて見ても、如何に釈尊の眞意が親鸞聖人の眞宗において実現せられたかを知るべきである。

○ この如く如来大悲の平等一味海に融合して見れば、大小の聖人も善惡の凡夫も、その本来のものをひるがえして、同一鹹味となるのである。

善人が善をもつて誇るべからず、悪人が惡をもつて悲しむべからず。如何なる大小の聖人も如来の膝下にひざまずきて、重軽の悪人と手をつらね、五逆十惡も三賢十聖と肩をならべて、涅槃の域に入るのである。

さればこそ歎異鈔に、我等が心の善きをば善しと思ひ、惡しきことをば惡しと思ひて、本願の不思議にてたすけたまうということを知らざることを誠められてある。

衆生の御同朋を説かれたる四海兄弟の念仏成仏は眞宗の精神である。

大正七年九月二十六日、第一高等学校、徳風会講話、「歎異鈔解題」の大意である。求道、十四卷五号所載。

近角先生の言葉

たすからぬものをなあ!

先生の御尊父、常隨法師の御臨末の枕頭で、

「おたすけ下さることがありがたいですね」

と先生が申されると、すでに舌もこわばって、もの言ふ

ことも困難ななかから

「たすからぬものをなあ!」

と、おこたえになったので、先生は思わず感涙にむせばれた。

宗門のありかた

宗門は団体主義であつてはならぬ。あたかも港灣に水の去来するにまかすがごとくであらねばならぬ。いな、十方衆生、みな同朋同行として、四海兄弟、同一念仏の鹹味を実現すべきが理想である。

(信興建現十号)

「篤く三宝を敬え」

白井成允

敬うという心持ち

「篤く三宝を敬え」という題は、申すまでもなく聖徳太子の十七条憲法の第二条のおことばであります。それで、このおことばをいただいて、しばらくこのおことばを味わってみたいと思うのでありますが、その初めに、敬うという心持ちが一体どういう心持ちなのであるか、そのことをしばらく考えてみたいのです。

これは、私の子供のときの経験であります。小学校の高等三年生、いまの中学校の一年生のころの経験で、私の小学校時代の教育がかなりきびしい教育であったと、いまから思うとおもわれるのですが、あるとき何の拍子であったか、私のクラスの三、四人が時間の最中に、少し話をしたり、がやがやしたことがあったのです。そうしたら、ちょうどクラスの受け持ちの山村材美という先生の時間でしたが、その先生がそのちよつとした騒ぎをひどくおしかりになりまして、あと時間の終わりにまで三十分以上、私ども

のクラスの全体がひどく先生からおしかりを受けたのです。授業時間中にむだ話をしたり、騒いだりする、何事だということ、先生顔の色を変えておしかりになった。私どものそのときの気持ち、先生が非常にまじめになってしまつて、顔色を変えてしかつておいでになる、その先生からしかられるんですからおそろしい、おっかない。けれども一面においては、その先生のしかつておいでになるお姿がこうごうしいような感じで、ああいう、こうごうしい先生から強くしかられているそのことが、おそろしいと思うと同時に、何かうれしいような感じもまじつて、そんな経験も子供のときにしたことがあります。

私はこの敬うという心持ちにはそんな感じがあるのかと思うのです。それは何か自分では及びもつかないような、高い、とうとい世界が自分の上に動いてきて、その前には頭が上からない。何かおそろしい、おっかないような感じがあらながら、同時にそのおそろしいものが、ほんとうは

非常になつかしい、とうとい力を備えている。そういうような先生の人格全体の中に動いている力というのが、私どもの心を何か押しつけてしまひましてね、その前に、とうといお姿に何かおっかないと同時に、とうとい、ありがたい、こうごうしい気持ちに心に動いてくる、子供心にそんな感じが起こったことがあります。私はこの敬うということばを読みますと、よくそのときの感じを思い出すのです。

星の輝く空と道德の掟

これはまた大学でもって西洋の學問をしておりましたときに、近世の哲學を基礎づけたドイツのカントという大哲學者の「実践理性批判」という、われわれの道德心を反省した非常にとうとい書物の一番おしまいの結びのところにカント自身の敬いの心持ちを述べているのです。これは有名な言葉で、カントのお墓に刻みつけられていることばです。

「世の中に二つのものがあつて、そのものを考えること久しければ久しほど、それを思うこと深ければ深いほど私の心を驚きとおそれをもつて満たしてしまふ。その私の心を深い驚異、驚きの思い、深いおそれかしこむ畏敬の思いをもつて満たしてしまふものが世の中に二つある。」

その一つは、私の上にかかつている星の輝く空、他の一つは、私の胸のうちにある道德的法則である。そのわが上なる星の輝く空と、わがうちなる道德のおきてと、その二つこそ私をして驚きおそれやまざらしめるとうとい存在である。

そういう感激に満ちたことばをもつて、カントはその倫理學の結びとしていっているのです。

カントという人は、若いころは物理学をきわめて、カントラプラスの星雲説、この宇宙が星雲から發生してきたんだという、その法則を確立した人です。それから五十年以後になつて、人間の認識能力だの、道德だの、宗教だのの法則を考えて、ほんとうに人間の道德というものがいかなる本質のものであるか、しみじみとした反省を残していてくれる偉大な哲學者ですが、その人がそういう言葉を残している。

私はこの敬うということばを聞きますと、カントがその星の輝く空を仰いで、しみじみとして、宇宙の永遠の偉大な法則を照し告げている星の世界のこうごうしさに打たれる。同時に自分の胸のうちを考えますと、いろいろのあさましい欲望や何かわいてくる、そのしつこい欲望なんかわいてくるのを踏みにじつて、自分の良心の純粋な心持ちに従つて生きていく。

カントは人間が人格として生きるところに踏みおこるうていく道徳のおきてという、法則というものを感得して、その道徳法の前に、ほんとうに畏敬の、敬いの心をもってぬかずいているのですね。何かカントの生涯を思いますとそこに敬うということが、天地の法則に対して敬う、自分の胸の中に動き出す道徳の法則に対して敬う、そういうしみじみとした敬いの心持ちの動いているのを非常になつかしく、とうとう思うのです。

悟り得た無上の道

それで、これは子供のときの経験とか、カントの姿とかを思ったのがね。いま私はこの仏教を学びまして、一番初めにお釈迦さまのご生涯を学びましたときに、お釈迦さまがかってこういうことを言っておいてになる。

「敬うべきものを持たないで生きていくことはさびしいことだ。だから私は真実に敬うべきものを敬いながら生きていきたい。その真に敬うべきものというのは何かと言えば、私の悟り得た無上の道そのものである。法である。私はその悟らせていただいたこの上なき法そのものこそ、ほんとうに敬わなければならない尊いもの、その法を敬いながら、私はこれから生きてまいりましょう」

そういうふうにお釈迦さまは申されておられる。だからお釈迦さまの生涯は、ご自分が悟りあらわした法そのもの

会わないということ、そんなに心配せずともいいよ。私がいづも述べている仏さまのみのりをほんとうに聞いていれば、それはいつでも私を見ているのと同じことなんだから、そんなに心配せずと、さびしがらずともよろしいよ」

そういうふうな慰めておいてになる。

お釈迦さまのおことばの中に「われを見るものは法を見る。法を見るものはわれを見る」いかにも淡々として、そういうことばが出ております。そこに法を敬い敬い生きておいでになったお釈迦さまが、法そのものと一つになってしまつて、お釈迦さまそのまま法となり、法がそのままお釈迦さまの身の上にあられてきている。そのことをお釈迦さまは自分でそういうふうにより自覚しているというのでもなく、自然に火が燃えるように、自然に水が流れるように、法そのものをあらわして動いておいでになるのですね。そういうような法が人となり、人が法となり、法と人と一つになって動いている。

そういうところに仏さまという方がおいでになるのですよね。そこに法を敬うということがいつの間にか法と一つになってしまつて、法を敬うている人が法となつて法そのものがその人の上にあられて、法がその人となつてしまつているという消息があります。そういう消息が敬うという心持ちの中に流れている消息かと思うのです。

を敬うて生きてこられた、そのご生涯ですね。法を敬い敬い敬うて生きておいでになりましたので、お釈迦さまは、いつの間にか、お釈迦さま自身生きている人間でありながら、法そのものになつてしまつておいでになる。

あるときバカリ、というお弟子さんが病氣になつた。病氣になつて久しくお師匠さまのお釈迦さまにお目にかかれな。バカリさんさびしく思つておられたら、お釈迦さまがそれをお察しになつて、わざわざバカリの病の床におたすねくださつた。それで法の話やなんか、いろいろなさいました。その話の中にこういうおことばがある。

それはバカリさんが、「私はお師匠さまにお目にかかりたくてしかたがないのですが、こんな病氣になつて、おたすねすることもできないで、さびしくてたまひませんでした。きょうはわざわざおいでくださつて、ほんとうにありがとうございます」と言われる。

お釈迦さまはそれにこたえて「バカリや、私に会わないからといってそんなにさびしがらずともよろしい。私のこんな肉体を見てどうしようというのだ。私をほんとうに見る、私にほんとうに会うということは仏のみにりに会うことだ。私を見るものは法を見る。法を見るものは私を見る。仏さまのみにりにほんとうに会う人は、それが私に会っているというものだ。だから私のからだに会うということ

それは、さつき申しました山村先生の、このまじめなお姿、人間はごまかして生きてはいけな、まじめに生きなければいけない。そのごまかして生きてはいけな、まじめに生きなければいけないという緊張しきつたまじめなお姿が、もう山村先生おかくれになつて何十年か過ぎてしまいましたが、子供のときにそういうお姿に会つた。それがときどき私の心の中に動いてきてくださる。そこにまじめならまじめという法そのものが、山村先生という人となつて、人となつたまじめの法、あるいはまじめの法を仰いでいる山村先生という人、その人と法とが分離することが出来ないように一つになつて、それが先生がおなくなりになつても、いまに至つてなお私の心の上に動いてきてくださる。そういうところに法そのものの永遠の命が動いていることが感ぜられるのです。

見・聞き・行う命

これは敬うという心持ちを初めに申し上げたのですが、そういうような法という、あるいは道ということばで、昔のとうとう方々は始終ご自身の命の上に道をあらわし、法をあらわして生きてこられた。そのことを私共は深く、みずから思わなければいけないのであらうと思うのです。それで、これは法句経というお釈迦さまの短いおことばを書きとめたとうとうお経があります。その法句経の中にこう

いうことばがあります。

「一人もし百年のよわいを保つとも、まことの道を見ずんば、まことの道を見る人の一日のよわいにしかず」

あるいは同じような、

「一人もし百年のよわいを保つとも、無上の法を聞かずんば、無上の法を聞く人の一日のよわいにしかず」

と同じようなことを言っておられるおことばがあります。

このおことばも、法というものの重大なる意味を、まことの道を見ると、この上なき法を聞くとか、そういう道を見、法を聞くことが、人間として生きていくゆえんの根本の意味であって、もし百年のよわいを保っていても、法を聞くことのない人、まことの道を見ることがない人、その百年の命は、あわのような命にすぎない。あさはかな、流れ去って消えてしまつて差しかえないような、あわのような命にすぎない。そうでなくて、ほんとうの道聞くほんとうの法を見る、そういう命、よしんば一日でも、まことの道をおのれの身に見、聞き、行なうということがあれば、その一日の命こそ、真実にとうとい命で、そういう命の前に、敬いの心をもってありがとうございますと頭を下げるを得ない、そういうことである。

何かそこに人間というものが、お釈迦さまが言われたように、敬うべきものを持たない命はさびしいという、これ

村先生の一時間の戒めの中にも動いている。すべてこの道とか法とか、山村先生のそのときのことばで言へば、人はまじめに生きなければいけない、ごまかして生きてはいけない、ごまかすことなけれ、まじめなれという教え、法があるでしょう。カントが星の輝く空を仰いで、感じたところ、自分の胸の中の道徳法に対して、こうべを下げるを得ない、その心。やっぱりまじめに生きようということに帰着するでしょう。

その道というものの内容が、たとえば孔子においては堯、舜、禹、湯というような、シナ民族の生んだ先王の道であり、カントにおいてはソクラテスとかイエスとかいう西洋の聖人の伝えた道であり、お釈迦さまにおいては、お釈迦さまがあの時代のインドのアーリヤ民族の生み出した豊かな文化の流れの中に入って、求め求めて、ついにみずからひとり悟り出したところの道である。

みずからひとり、悟りいだした道と云いまして、お釈迦さまが、仏の道というものは、仏が生まれて悟りいだしたからあるとか、仏がなくなつてしまふからなくなるとか、そういうことでなくて、仏が生きていようと死んでしまおうとも、そのいかにかわらず、永遠に存する道なのだから、そののりを悟り得たしあわせを喜ぶ、そういうおことばがあります。そこに私どもうかうかとして生きておりま

はお釈迦さまがさびしいということばを使つておいでになる。何か敬うべきものを持たない命はさびしい。まことの法を聞くことのない命はさびしい。無上の道を見ることのない命はさびしい。そういうさびしい命を生きているのでなくて、ほんとうに満ち満ちた命を生きていきたい。お釈迦さまはそう思つておいでになつたのでしよう。その満ち満ちた命と言うのは、ですから道を行なうとか、法を行なうとか、そういう命なのでしよう。

それは、たとえばお釈迦さまでなくても、シナ民族の生み出した聖人孔子さまのことばに「あしたに道を開けば、夕べに死ぬるともよし」ということは、ほんとうの道を開けば朝聞いてその晩死んでも差しかえないというのが、道を聞かずに長生きしていつか、むだな命であり、ほんとうに道を開くならば一日の命でも真実にとうとい命なんだそういうことを言つていくたさるのてしよう。

始めなく終りなき道

それで、前に申しましたカントが、夜、星の輝く空をながめながら、天地に満ち満ちる偉大な法則に驚きの心を催さざるを得ないという、それと比べて、自分の胸の中におきこる道徳法に対する敬いの心、道のおきてを敬うという心、そこに敬いの心がしみじみと動いている。みんなあいう方々に共通したお心なのであります。それは山

すけれども、ほんとうに道に直面し、法を真実に身に悟つた方々の深いことばがいたるところにあらわれていることとあります。

それで「篤く三宝を敬え」という聖徳太子のおことば、その敬うという心が永遠の道に対して、おそれ、かしこみそれを自分の身にあかししようとする、真剣な願いを伴っている。そういう敬いの心、これは私どもも生きている間にほんとうに一たびでもいい、真に敬うという気持ちを経験したいものなんです。子供の時代に、先生によって、そういう敬いという気持ちを経験せしめられる。あるいはおとうさま、おかあさまの教えによって、このしみじみとして敬う、慎む、かしこむというような気持ちを経験せしめられることがあれば、それは非常にしあわせなことだと思ふのです。教育という場面は、根本においてはこの人生、宇宙に永遠に敬うべきものが存するのだということを、子供達の心の中に植えつける、そのことがあらゆる教育の根本だと思ふのであります。

理想実現の根本の道

それで、敬うということばについては、それだけにしておきまして「篤く三宝を敬え」そのおことばについて、何を敬うのであるか。いままで私は永遠の法とか道とかいうことばでもって、その敬うべきもの、対象を述べてきまし

だが、何を敬えはいいのであるか。聖徳太子の十七憲法には、「篤く三宝を敬え。三宝とは仏と法と僧となり。すなわち四生の終帰・万国の極宗なり。いずれの世、いずれの人が、この法を敬まわざる、責はざる」そういうおことはなっている。つまり三つの宝とは、仏さまと、法という仏さまのおしえと、それから僧という、そのみおしえに従って生きる人格、その仏と法と僧の三宝を敬うのが重要なことであるという。

これは申すまでもなく、さつき金治先生がお話されました「和をもって貴しとなす」やわらぐということが、ほんとうに人間の命にとって、とうとうとなのであると、いにしえの神々、聖人の方々が、そういうとうとうと教えをお伝えくださったと、太子さま、そのいにしえの神の教え、聖人の教えの一番とうとうと教えを第二条に伝えていくのださる。それは第一に「和をもって貴しとなす」そのおことが聖徳太子にとって、いにしえの神の教え、聖人の教えの神髓を伝えて、日本民族の大和の国の理想を示したもうたのでありましょう。

その大和の国は、やわらぎを理想とし、平和を理想として立っていく国なのであるということをお教えくださったのでありしうが、その理想をほんとうに実現するにはどうしたらいいであろうか。そこに「篤く三宝を敬え」と

な、努力をせずにいながら、戦勝国の仲間に入って、それでまたたく間に非常な経済的の富を得て成金になって、大正の初めのころの景気がよくなつたということが歴史の流れを見ますと、日本国が、国民全体が心おこつてしまつて上つ調子の気持ちになつて、その心おこりたかぶつた気持ちから、第二次世界大戦の中に流れこんでしまつて、国を滅ぼすというような災いにおちいった。

私は何か財宝というこの経済の宝というものが、人間におけるほんとうの宝なのでなくして、その宝の中に非常な罪惡を含んでいる。危うきものを含んでいる。いのちを失わしめるものを含んでいるということを、あのときの経験でしみじみ思うのです。今日昭和元祿というようなことは何か世界第三位の経済的發展を遂げたといつて、うちようてんになつておりますが、私は国民全体が昭和元祿という呼びかけに応じて、うちようてんになつて、この姿は大正の初めの成金のムードと同じもので、やがて國民をしてほんとうの苦しみの中に転落せしめていくような機運をうちにはらんでいるのでないか、そんなことがしきりに思われるのです。それで財宝という宝がほんとうの宝でないことを申し上げたのです。

人間の知識は宝か？

それから私どもには宝というものがいろいろありますね

いう仏・法・僧の三宝を敬うことが、やわらぎという人類の、あるいは大和の国の理想を実現する根本の道であるということをはっきりお示しくくださった、その仏と法と僧という三つの宝もの、人間の宝ものというのは、どういふものなのでありましょうか。

私どもがいろいろのものを宝ものたと思ひますね。宝という字で一番早く感ぜられるのは財宝、お金の宝、お金というものはほんとうに宝ものでして、お金がなければみんな困つてしまふ。お金があることによって豊かな生活ができてくる。それでお金は個人的にも、社会的にも、國家的にも宝ものであるということに間違ひはないようですね。國家的に、このころでも西洋の諸國でも、あるいは日本の國でも財政経済ということが非常な問題となつてゐる。國家社會の理想を実現するためには、経済が豊かでないといけない、お金が宝である。

ところがこのお金という宝も、私のいままでの生涯の経験の中では、第一次世界大戦が終わつたときに、日本國に成金ということが生まれてきた。大阪の商人たちが、あの第一次大戦が終わつてのちに急に成金になつてしまつてあの大戦の中に、西洋諸國が国力を賭して戦つた。非常な困苦を経て戦つて勝つたものがあり、負けたものがある。日本國はそれほど努力をしないで、いわば遊び半分のよう

子供にとつて、おとうさま、おかあさまは眞実の宝であるしかしそのおとうさま、おかあさま頼つて、眞実の宝としてゐることが、その子供の生涯、ほんとうに続いていくてありましようか。父、母がなくなるといふことがあり得る。あるいは人間には知識といふことが宝である。しかし人間の知識がほんとうの宝でありましようか。私は原子爆弾なんていうものを考え出す、あるいはフランスがいま太平洋において原爆の実験をしてゐるやうであります、あの太平洋における原爆の実験といふことを思ひますと、私には人類が地球の表面に生きてゐながら、いつも非常な罪惡を犯さずにはゐられない存在なんだといふことを思ひます。

太平洋のあの海の中に何万、何億という魚が住んでおりますね。それらの魚が、あの原子爆弾の実験によつてどうなつていくのでありましようか。おそらくむさんに殺されていくのでないかと思ひますね。人間であれば声をたてて原爆実験をやめよう、それが人間の命を滅ぼすからと云つて訴えますが、太平洋の水の底に楽しんで遊んでゐる魚などは、訴えて抵抗を示すこともできない。知らぬ間にみんな殺されていく。そういう悲惨なことをすることを何か人類の權利であるかのごとく考へて、少しも反省しようとしなない。こういうやうな人類の横暴なありさまは、人類が

滅亡していく運命に向かって歩みつつあることを示すものである。何か私には仏法の因果応報ということばを思うにつけて、そういう真理も思わずにはおれないのです。

それで人間の知識というものはほんとうの宝ではありません。それは月に達する、あるいはほかの遊星に達する宇宙飛行を完成する。そういうことをしましうか、そういう知識がどういふ働きをするのであるか。人間の知識というものが人間を滅ぼしていく働きをする。そういうことはいまの情勢から幾らでも考え得ることです。ですから、単なる知識が真実の宝なのでもありません。

このころは科学文明の世の中だという。科学ということが人類の生活を豊かにし、手近く私どもの寿命を長らえてくれる。まあ私なんぞ現代医学のおかげで、もう二十年くらい前に死んでおるべき人間が、いまこうして生きておりますがね。それはありがたい科学の進歩でありますけれども科学の進歩が必ず人類の宝であるということはできない。かえつて人類を滅亡におちいらせる悲惨な運命を生ずるということも言えるでしょう。

おかあさんの涙

そんなことを思うと「三つの宝とは仏と法と僧となり」というお言葉が、この人間の宝というものは真実に何なのであるかということを考えさせてくださる。さつき子供に

が、私にはその日記とともに、そのときの状態が絵に見るように頭に浮かんでくるのです。

それは、からんどうの広い部屋を、母が私を赤い毛布にくるんで、胸に抱いて、いつたりきたりしているんです。胸に抱き上げて、おかあさんポロポロと涙を流している。「成坊が死んだらどうしよう、私も死んでしまいたい」そう云いながらポロポロと涙を流して、そして私の顔に自分の頬を押しつけて、その涙をぬぐっている。その光景がどういふのですか、私そのころ五つの年であつたんですが、目に見えらるるにあらわれてくるんです。

何か私少し重大な問題が起こつて、自分ひとりて自分のことを考えなければいけないときになると、その「成坊が死んだらどうしよう。おかあさんも死んでしまいたい」という、その声が響いてきまして、だから七十年前になくなった母が、実はいまも生きています。そういうところに、さつき金治先生の言われた一円ということば、見えない一者がいつも現実に生きているということ、七十年前になくなってしまった母が、七十年後にやはり生きていて現実に私の心を動かしてくれる。私の身を守ってくれるのである。そういうところに法というものの消息があるので

現身仏と法身仏

とって、おとうさんや、おかあさんが宝であると申しました。しかしその父も母もやがてさきだつてなくなつて、宝として頼るところのものがなくなつてしまふということに申しましたが、私は父、母の命ということについてこういう感じを持つのです。

私は十一歳のとき母に死なれましたがね。十一のときになくなった母という、それは肉体的にはもう半世紀、いや七十年前も前に別れてしまつた母親ですが、しかし私のいままでの生涯を顧みますと、その母親の命がいつも私につきまつわつていてくださる。それはもちろんこの肉体の存する間、母親の命がつきまつわつてくださっているのは、肉体的にもあたりまえですが、そういう肉体的の意味ばかりでなしに、精神的に私の生涯に何か重大な問題が起こつてくるというときおかあさんがいつも私を抱いていてくださる。これは私の母を思ひますと、母の残した日記帳が一冊私の手元にあります。それは雁皮紙を四つ折にして毛筆で書いてある。その日記帳の初めのページに「成坊が病氣になつた」と私の病氣のことがかいてある。「熱は高いのですぐにお医者さんに見せたけれども、どうなるかわからな」といふ診察だ、心配なのだ。翌日になつての記事に「成坊の顔に斑点があらわれてきたから、はしかだとわかつて安心した」といふことが書いてある。そのときのことです

仏法僧の仏というのは、簡単にごくわかりやすく言えばお釈迦さまです。お釈迦さまが仏の悟りをお開きになつたしかしそのお釈迦さまは、八十年の生涯でおかくれになつたでしよう。しかし、このお釈迦さまの教えを承わつた仏弟子の方々にとつて、お釈迦さまが、もう世の中にいなくなつて、なくなつてしまつた、そういう感覚だけになしに、お釈迦さま、自分たちのお師匠さまは、からだは見えなくなつてしまつたけれども、そのみおしえは、いつまでも私どもの心の中に生きています。そういう経験が深い人間の心のしみじみとした経験が生き長らえておられたでしよう。そこに仏という存在が、単にお釈迦さまという現身仏肉体を備えた仏さまであるばかりでなくて、うつせみのからだはもうなくなつてしまつたけれども、永遠に私どもの心の中に生きていてくださる法身仏である。仏は單に現身の存在でなくて、このうつしきをもつてあらわれたのは、その奥に法身の仏があらわれるからだという認識、悟りが仏弟子の中に起こつてきたのです。

それは人間でも、父や母の生きている間は気がつかないけれども、父や母がなくなつてしまつたのちに、それもなくなくなつてしまつてかなり年月を経たのちに、自分の身の上になにか深く考へべきことでも起つてくると、そのときになつてなき父、母の命がしみじみとしのばれてくる。そこに

眞実のいのちというものは、単に肉体にあらわれた命だけでなくて、心から心に伝わってくる眞実の命があるんだというところがわれわれにもわかるでしょう。そういうことが仏弟子の方々の間にも生じてくる。そこがこの現身仏を唯一の仏としている小乗仏教から、そうではなくて現身仏を現身仏たらしめる根本の仏さまである法身仏が常住である、永遠にとまっておいでになる、その常住の法身であられる仏さまこそ眞実の仏であるという深い悟りに入って、そこに大乘仏教が開けてきた。大乘仏教はそういう常住の法身を仏として仰ぐ立場、教えであります。

それで法といっても、小乗仏教において、初めのうち法とはお釈迦さまのお説きになられたお説法、お釈迦さまのお教えになったおことば、それが法といわれるものである。それは、みんなお弟子さんたちが、その教えにのつとりて、いきるべきとうといひおしえですから、それがお弟子さんにとって法でありましたが、そのお釈迦さまの口ずからお語りになったことばが、やがて文字に写されてお経となってくる。そういう説法とか、お経とか、そこに法を見ているのですが、さっき申しましたように、私が悟ろうが悟るまいが、仏が世にあらわれようがあらわれまいが、仏の法は常住である。悟る人がなかったって、法そのものはふだんに存在する常住の法である。よしんば語り伝えるお

経がなくても、法そのものは永遠である。その永遠の法を見たものは、その永遠の法を現在われわれが見るように、永遠に伝えざるを得ない。そこに大乘のもろもろのお経があらわれてきております。

その大乘のもろもろのお経にあらわれるおことば、永遠の仏のおことばとして、永遠に衆生のための法となるべきもの。私どもがいつでも、どういうときでも、また東洋の人間でも、西洋の人間でも、どこの国の人間でも、そのみおしえに聞いていくところVに眞実の人間の命が生き得られるんだ。

眞実の命を生きようとするれば、その仏の永遠の法によらなければいけないのだという信念が生れてきて、そこで仏が単に現身仏、お釈迦さまだけでなしに、常住の法身も伝え、同時に法というものが単にお説法やお経だけでなしにその常住の法身が永遠にわれわれの行ないの眞実の規則となってくたさる、おきてとなってくたさる。その常住の法身の示したもうおことばが、いつも衆生の眞実に行なうべきおきてとなつて、そのおきてに従って行なえば、人間の命が榮えていくし、そのおきてにそむいて行なえば、人間の命が乱れ、滅びていく。そういう人間の命を眞実ならしめる、豊かならしめる、榮えしめる、永遠の法というものが認められてくる。

永遠に眞実の命

それで、何かむだな話ばかり長々としたようで、もう時間が無いのですが、私もう半分くらい話いたしたいんですが、あとはもう簡単に申し上げます。

その「篤く三宝を敬え」という、そういう常住の法身、私どもが、この私どもの命全体をささげて、ほんとうに敬うべきものを持つ、その敬うべきものは仏さまである。仏さまは永遠に生きておいでになる、永遠に眞実の命を私どもに與えてくださる法のおからだである。その仏さまの教えを、とうとい規範として生きていくところに、私どもが道にかなった、道理にかなった生活をする事ができるのである。そういうことを話の前半に申し上げます、それからもうと申し上げようと思つていたんですが時間がないようです。

ただ一つだけ申し上げておきましょう。私どもが常住の法身、これはお釈迦さまを生み出した、もとの仏さまということばで言つたらいいでしょう。八十年でおかくれになるような仏さまでなくて、永遠に生きていくくださる仏さま。その永遠の仏さまを敬い、捧んでいくところに眞実の命が与えられる。それはお聞きくださる方々に、こういうおことばだけお伝えしてお別れいたしましょう。

常住の法身仏から、永遠不変の法が感ぜられてくると、そこに僧というの単にお釈迦さまの教えに従って生きるというだけの人格ということになしに、僧—サンガということばは、本来和合という意味です。やわらぎ、かなう、眞実の道理にあてはまりかなう和合僧、この僧が和合の姿である。

それで「篤く三宝を敬え」ということが、初め簡単な表面の意味においては、お釈迦さまと、お釈迦さまのお説きになったお説法と、それに従って生きていく人々と、それは三宝に違いありませんが、そういうみおしえ、そういう人に頼っていくことが、人間の生活にとって、ほんとうの宝なんだということであります。そのほんとうの宝も今まで申したように仏と法と僧との三つの宝を表面からだけ考えずに、もっと深く考えられて内面から考えると、この三宝が本来一体なのだと思はれてくる。これを一体の三宝と申しておられますが、即ち常住の法身と、その法身がすべての人々のおきてとなるところの法と、それから、その法がすべての人々を和合せしめる、仏さまのお悟りの道理とかのうている。ほんとうに悟りの道理に立つて人間社会を和合せしめる、やわらげしめる、そういうところに仏法僧の僧という、その意味に置きかわってまいりまして、そこに大乘仏教が成立してきたのです。

「如来調伏、帰依如来、得法津沢、生信樂心」

このおことは、太子がおはさまの推古天皇のみまえてご講義申し上げた。そして詳しい注釈を残して伝えてくださる勝鬘經というお経に、如來に調伏せられて如來に帰依す。法の津沢（しんたく）を得て信樂の心を生ず、そういうおことばがある。

これは如來に調伏せられ、私どもが仏さまに帰依するという、まあ私ども、こういう四天王寺というような、とうといお寺に参つて、仏さまの前に手を合わせ、仏さまを礼拝する。そういうようなことは何か偶然のことか、簡単なことかのように思いますが、そうでなくて、私どものようなものが、一たびでも仏さまの前に手を合わせ、仏さまを礼拝するという、如來に帰依する、手を合わせて、拝むということができる前には、如來に調伏せられ、仏さまのほうがいりご苦労くださって、私どもの心を整え、まつらわしめてくださっている。仏さまのご苦労がかげにあつてたとえば四天王寺にお参りする、簡単なことのようにですがほんとうは千三百年の昔に、聖徳太子、このお寺をお建てくださった。そのおかげで千三百年、日本民族がこのお寺を維持してつないできてくださった。そういうような千三百年の歴史が背景にあつて、はじめて私どもがこのお寺にお参りし、手を合わせて礼拝することができる。そういう仏さまの方のご苦労、常住の法身の絶え間なきご苦労によ

つて、如來に調伏せられて如來に帰依する、法の津沢を得るという、津とか沢とかいうものは水があんまりたくさんあるところではない、じめじめしているところ。その仏のみおしえが、じめじめと私どもをしめらせてくださって、急に洪水でもあつてどうこうというのでなく、ふだんに、たとえば朝晩お仏前におまいりするとか、こういう四天王寺の会に、月二回とか三回とかおまいりするとか、そういうふだんに、じめじめと法の潤いをうけるところに信樂の心を生ず、信心に樂しむ、信心を得て樂しむ、仏さまのご恩に生かしていただいている。

ほんとうにご恩のおかげでありかとうございしますと、自分の生活の奥に、真実に敬うべきものを見、自分の生活がありがたいご恩のおかげと樂しませていただく、そういうことを得るのは法の津沢を得て、そうならせたいと、いう、これは勝鬘經のおことばの中の非常に感銘の深いおことはでしたから、このおことはを申し上げて、何か話し足りない話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございます。

（四天王寺誌、三三六号）

平生業成

和才誠司

八月は盛夏の候ではあったが、平常健康を誇っていた友人が、わずか一ヶ月の間に三人までも突如として逝去した。法友渡辺一郎君は、すこぶる元気で、本年八十七歳、来年は米寿を祝つて貰えると思ひながら、去る八月二十九日朝、平常通り起床し、家の周囲を掃除し、芥箱（こみばこ）まで整理し、朝食を待つ間、一寸横臥し、転寝（うたたね）していたところを、心臓麻痺に襲われ、傍に居た夫人さえ気づかぬ間に緋（こと）切れ、既に浄土に往生していた。

出する息（いき）は入る息を待たずというが、無常の迅速なること今更ながら身近かに強く感じた。

八十七歳の高齢者が死去したのだから驚くことはない筈だが、同じ年頃で近所に住まい、朝晩顔を見て、親しく語り合っていたから、他人のことと思えず、人生のはかなさきびしさを深刻に感ずると共に、平生業成（へいぜいごうじよう）でなければ、私は往生出来ぬことを痛感し、平生

業成の厳肅さ、ありがたさを感じしみ肝に銘じた。

渡辺君が示してくれたように、寢死の場合とはより、其他病苦に責められて死する場合、臨終、放心状態になるか、或は病苦と闘うに渾身の努力を注ぎ、死を考へる余裕はない、要するに人の本心が、自己の息の絶ゆる断末魔を知ることは出来ぬから、臨終を期することが出来ぬ。従つて臨終業成は私にはあり得ない。平生業成とは、臨終業成の対、浄土真宗にて、平常の時に於いて、弥陀をたのむ信の一念に、浄土に往生することに決定するをいうのである。

教行信証の行巻に「弥陀仏の本願を憶念すれば、自然に即の時必定に入る、唯能く常に如來の号（みな）を称してまさに大悲弘誓の恩を報ずべし、といえり」と云い、尊号真像銘文には「如來より御誓を賜わりぬるには、尋常の時節をとりて、臨終の称念を待つべからず、ただ如來の至心信樂を深めたのむべし、この真実信心を得ん時、攝取不捨

の心光に入りぬれば、正定聚の位に定まると見えたり」と云われている。

寛如上人は、口伝鈔に『聞信する平常のきざみに治定するあいだ、この機体亡失せずといえども、業事成辦（こうじしようべん）すれば、体失せずして往生すと、いわゆるが、本願の文あきらかなり』と云い、また執持鈔には『平生の一念によりて往生の得否は定まるものなり』とある。

蓮如上人は、御文章一帖目第四通には『当家には一念發起平生業成と談じて、平生に弥陀如来の本願の我等をたすけたまうことわりを聞きひろくことは、宿善の開發によるが故なりと心得ての後は、わが力にてはなかりけり、仏力他力のさすけによりて、本願の由来を存知するものなりと心得るが、即ち平生業成の儀なり。されば平生業成というは、今のことわりを聞き聞きて往生治定と思ひ定むる位を一念發起、往正定聚（しようじようじゆにじゆうす）とも、平生業成とも、即得往生住不退転ともいうなり』と示されてある。

御文章一帖目第十三通の十劫秘事（じつこうひじ）には『十劫正覚の初めより吾等が往生を定めたまえる弥陀の御恩を忘れぬが信心ぞといえり。これ大きな過りなり。そも弥陀如来の正覚を成りたまえるいわれを知りたりというとも、われらが往生すべき他力の信心といういわれを知ら

でも御配慮を煩わした。

信仰即生活、生活即信仰である。即ち念仏の中に私の生活があり、私の生活の中に念仏が入り満ちている。

何時、如何なる不慮の事故、災難に遭っても、いささかも間違いないおたすけをよるこぶのみ。街路を歩いていても、何時どこから車が襲いかかるやも図られず、絶えず戦

すばいたすることなり。しかれば同後においては、ます当流の眞実信心ということをよくよく存知すべきなり』と示されてある。

単に知っただけでなく、信の一念にその本願が私の現実に即し、罪惡の私をどこどこまでも攝取したまう広大な御慈悲に安心し、疑わんとして疑うことできず、逃げんとして逃げることの出来ぬ、絶対他力救済の極致がありがたい要するに、信の一念に往生の業事は成辦するから、これを平生業成という。

いろいろと法文を引用し、説明風になり、申訳けないがかねて慶んでいる法文を思い出し、ここに繰り返し拝読し慶ばしていただいたのである。信仰は理論にあらず、現実の問題である。不可称、不可説、不可思議の願力を論議したり、思惟したりすることではなく、私のすべてを願力にまかせ、日常生活にこれを味わい、仏恩を感謝し、わが身の罪惡を懺悔するばかりである。

近角常観先生は常に私が直面している現実問題を通じて指導せられた。私の迷っている實際問題を法義の上から導き下さるのみならず、これを先生御自身の問題として、先生のあの御多忙の中から懇切丁寧に指導せられた。その場かぎりではなく、のちのちまで御指導いただいた先生の御恩先生の感化、印象は忘れることが出来ぬ。実は結婚問題ま

々競々として不安におびえている日常生活に、平生業成の誇りを持ち、何時いかなる災難に遭ってもみ仏に助けられ一寸先は闇でなく、光明である信念を堅持し、正々堂々と心安く大道を歩みさせられていると、心に余裕ある生活をさせて頂き、仏恩の中に生かされている。

長岡鶴吉翁を悼む

千葉 崇 憲

長岡鶴吉様が、九月四日往生の素懷をとげられた。まことに妙好人、上々人であられた。

一昨年五月十八日夜、酒見忠勢老師の祥月ご命日のこの会（満濃町求道会）にご出席下さって、いつになく近角先生のお話など自分からなさってくださった。それが会に来られた最後になりました。そのあと「善見薬王の如し、一切煩惱（の病い）を破するが故に」という掛け軸（近角先生御筆）を贈ってください、形見分けと思い、丸亀まで参ってみるとお元気でありました。

その後お休もすこし不自由でもあり、東京へ移られ、お

子様のところでおくらしでありましたが、時おり郷郷せられ、昨年高塩様方でお会いしましたのが、今生のおわかれとなりました。

長岡さんは酒見老師のそばにいつもおられ、影の形にそうように昭和二十年の九月から昭和二十五年の五月まで、毎月の会にはかならず来られて、老師と一緒に泊って、お話を席ではだまって聞いておられ、すむと老師と床をならべてお話するのを楽しみとせられていました。まことに老師は仏さまで、長岡さんは観音さまという感じでした。

私は、昭和二十六年五月十八日酒見老師御往生、悲歎にくれ人生問題をかかえて長岡さんをたずねて参りますと、真夏の陽の下を長岡さんのお宅の近くまでまいつたとき、酒見老師が単衣姿でこちらへ向いて歩いて来られたのです。いま考えても夢ともうつとも境がありませんけれど、歩いていく私の眼には例のように歩かれる老師のお姿を感得されたのです。

もう夢中で長岡さん宅へ着き、お仏壇の前でむき合ったまま長い長い間だまって涙をこぼしているばかりでした。

その日帰るまでに長岡さんが私にいわれた言葉は

「千葉さんあなたはまだ自分の力で教育できるように思っていたのですか。それは自力です」

ということと、

「酒見先生のようにになりたいと思うてもそれはなりません。鳥（からす）が鶉（う）の真似をしたら水におぼれます」

という二つのことでありました。念仏せしめられて二年念仏申されるということによって、すこしはおやくに立っておるであろうと何時の間にか高あがりしていた私を、遠慮なくたたきつけてくださったようです。その数日後の晩、突然今までの煩悶がとけて反対に大法喜を与えられました。人間対人間ではどうしてもとけぬなやみも、仏様が

出て下さるとたちまちよろこびに大転換をいたします。

この春の長岡さんからの高塩さんへのお手紙の中で（これが最後のお手紙）

「手も足も不自由な身（腦溢血症）にも、念仏は所いとならず時をきらわす。……失張り命は惜しきものにこれありそうろう、由来煩惱無尽蔵とは申されながら、さりながら力なくしておわるとき、近角先生、酒見先生、先師有縁の方々の多くおわします彼の土（お浄土）へまいりぬるかと思えば、ありがたくもまたうれしからんか」と仰言っておられる。近角先生、酒見先生、笹井さん、菊壇のおばあさん等、先師有縁の方々と御物語りのことと拝察いたす次第であります。

明日の夜は照りますものと知りながら

入るさの月の惜しくもあるかな

私にきびしい方もやさしい方も、生きておあいできる方もなくなられた方も、南無阿彌陀仏の御廻向をこうむって見ると、すべて仏心のこめられた一子地（いつじじ）、仏の一人子）の世界において結ばれている。すべて仏さまのまちびきの世界である。私とあなたは仏によって想われるということにおいて、仏々想念であるようにありがたく思わせられてきた。

（四十三年九月十八日）

母の法の歌をしのびて

松 井 哲

父も母もすでに逝き、お浄土に遷って以来、十年廿年と

なりましたが、思えば、両親の法の恩師であり「善き人」であった亡き池山先生や数々の法の御同朋、御同行方のお導きにより、ちちはが信の眼をひらいて、今は共に浄土に往生して居りますことは子として感謝に堪えませぬこととであります。

このよき父、よき母の因縁によりこの世に生をうけ、しかも遭い難い仏法にあわせて頂きました私は、また何という幸福者でありましょうか。今もなお母を想い浮べては、何処にても、何時にても、私を見護っていてくれ、私の心の支えとなっていてくれます。

母は島根県出雲市の真宗の家に生れ、九州の日向から法然上人のゆかりの地の鹿谷の法然院の街に移り住み、一家揃って信仰を喜びつつ、昭和三十二年八月二十八日に七十三歳で亡くなりました。その間、心に味わうまますを歌にしておりましたので、亡き母の記念にと思い、慈光誌へ記載

していただきました。

母の遺詠

今日もまた御名のちからにまかせつつ この世の旅のたのもしきかな

思うことかなわしとても歎かざれ 仮りの世なれどほとけいませり

人とわば、無しとのみ云う賤が家に 我呼びたまう御声ありとは

六十路の旅、はやも暮れたりともしひの ただに嬉しき弥陀の御宿

御仏の御名聞くためにこそうつし世に 生れ出でしと母のたまいき

六十路越え、今日もおもえり父母を 弥陀たのむ身とそだてたまえば

御名称う我を生みてし垂乳根の み親おもえばなみだこぼるる

どう考えて見てもおのれは地獄ゆき　どなたの御手に
もあわれ我なり
久遠よりついでにはなれて下さらぬ　弥陀さまゆえに我
すくわれぬ
六道の空飛び迷う旅がらす　やがてかえるや弥陀の古
車に

亡き夫をしのびて

わがせこの残したまいし宝もて　われひとすじに生き
んとぞ思う
寂光の法のみやこにはほえみえています君なり　われは
泣かざり

お六字の御名呼びたまえり　われもまたともに称えて
よろこびしかな

何事も悔ゆることなき我身ぞと　よろこびたままいし夫に
てあり

永観堂のみかえり如来

みかえりの阿弥陀ほとけにぬかつきて　仰ぎ見るかな
燃ゆるもみじ葉

ひとすじにただひとすじに歩み来し　道みかえりの阿
弥陀みほとけ

無碍の一道

世はうつり人はかわれどとこしえにかわらぬものはま

ことなりけり

あなとうと　法然院より浄土寺の　町にうつりて十歳^{とせ}
過ぎたり

萩にすすきになでしこや　可憐なるかな　秋の七章

(追記) 以上、まことに拙いまとまりもない歌であります
が、母が無我に念仏申してよろこんでいた姿が私には忘
れられません。私は只今福島県に住んで居りますが、親
鸞聖人ゆかりの地、稲田の草庵や、板敷山などにもおま
いりいたしました。亡き父母や、有縁のよき人々に導か
れて、念仏の日暮らしをさせて頂いておりますが、今後
共に皆様のお導きをお願い申し上げます　合掌

島仁師の愛唱句

吹く風はよし強くとも

巖はついに動くことなし

ほまれにあうも　そしりにあうも

さかしき人はかたむかし

師の愛唱句でした。師は谷大在学時代、聖鸞寮
で共に念仏した友です。去る七月逝去されまし
た。



あ と が き

謹しんで年頭の
およろこびを申し上げます。

歳旦をますおとするる念仏かな

御名ありてここに芽出度き難意かな

初日出、念仏のごとさわやかに

内田 卓三氏

明治百年は賛否まちまちの中に、種々いろどられて過ぎましたが、未解決のままに、安保問題、沖縄問題、大学紛争問題と山積しております。個人々々の問題にしましてもよかれ、やすかれと心からわがいが、年とともに苦がはてしなく続いております。それにつけても

生死の苦海ほとりなし、久しく沈める我等をば
弥陀弘誓の船のみぞ 乗せて必ず渡しける。

の御和讃をあらたに身に味わうことであります。生死の苦海はほとりなしであります。私共は何時か楽が来るだろう何処にか安らぎがあるだろうと、毎日毎日一生懸命になっておりながら、幻滅また幻滅を繰り返しております。この私共の姿の底まで見抜かれて、苦海よ、と呼ばかけられ、本願に帰れと、絶対安住地帯をお教え下さることは何というありがたいことでありましょうか。

ここに「人事を尽くして天命を待つ」の猪武者の冒険な突進から「天命を知って人事を尽くす」という落着いた努力をさせて頂けることは、この上もないよろこびであります。ここがひらけないでは、機械に油がなくなったような、潮の退いた海浜にゴツゴツした岩が醜く露出するような荒涼とした人生に終るほかはありません。

池山先生訳、
ドイツ語歌集異鈔

定價、三五〇円也

東京都新宿区赤城下町四六、理想社。
御希望の方に御紹介申し上げます。

御 案 内

◆ 毎月第一、二、三日曜、午後一時半、

一道会例会。

市電、新郊通り二丁上車。

◆ 毎月二十四日、午前・午后、

昭和小教町教西寺、法話会。

市電、御器所送り下車。

定價 半年 二百五十円 (送共)
一年 五百円 (送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫

電話八二一〇七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷 人 吉野 穂志郎

名古屋市中区駄上町二ノ八八

發行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番